

神殿に捧げられるイエス

ルカによる福音 2:22-40

モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はイエスを主に献げるため、エルサレムに連れて行った。

それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。シメオンは幼子を腕にき神をたたえて言った。

「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり

この僕を安らかに去らせてくださいます。

わたしはこの目で

あなたの救いを見たからです。

これは万民のために

整えてくださった救いで、

異邦人を照らす啓示の光、

あなたの民イスラエルの誉れです。」

父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。」

——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます

——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いでから七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、そのとき、近づいてきて神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

きょうの福音は 22 節からとなっていますが、その直前の 21 節にはこうあります。

八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。ルカ 2:21

ところで「お七夜」子どもの名前をつける命名式という意味合いで現在も日本の習俗として続いています。赤ちゃんが生まれて7日目がお七夜。これは日本式のかぞえで7日目ですので、実際は8日間となります。たとえば3月1日に生まれた赤ちゃんならば3月8日がお七夜です。聖書(ルカ2:21)にある割礼の日、命名の日とよく似ています。また、宮参りという日本の習俗はいまではだいたい一ヶ月後(男の子は生後31・32日、女の子は32・33日)となっています。22節にある清めの期間というのはレビ記12章によると33日間です。だからなんだというわけではないのですが、なんかよく似ているのです。ついでに説明すると律法による清めの期間は40日です。これは子どもの清めの8日目と母親の清め33日を足して40日と数えるようです。

さて、きょうの福音では、ヨセフ・マリアは律法の定めどおりに儀礼をおこなう良い信仰をもったユダヤ人ということがわかります。エルサレム神殿へイエスの初宮詣でに、いけにえを捧げるために出かけたとあるからです。一家はそこで二人の人に出会います。聖霊のとどまる人シメオンと女預言者アンナです。

神殿の近くに住んでいたシメオンという人はイエスを抱き、救世主が到来したことを神に感謝しました。そして29節から32節にかけてシメオンの賛歌、ヌク・ディミティス「今こそ主よ、僕を去らせたまわん」が記録されています。これは寝る前の祈りのとしていまでも親しまれています。

またアンナは未亡人で84歳、神殿で日々祈りと断食をして神に仕えたたと紹介されています。イエスが両親に連れられてエルサレム神殿にお参りしたとき、イエスを救い主と悟り、女預言者としてエルサレムに住む人々に救い主イエスのことを告知したとあります。

実はわたしは、きょうの福音箇所をイエスのお宮参りのエピソードとして、あーそういうこともあったのですねという風にしか読めませんでした。後半に限って言えば、シメオンの賛歌に付属した地の文としてルカが記録、採取した物語なんですね、という見方、少しかっこうつければ文学的に読んでいただけでした。なかなかイエス誕生のリアルな物語として受け止めることができずにいました。

でも、今回読み返して見て、これは旧約と新約が合体というか、つながりを説明する福音なのではないかと気づきました。

マリアとヨセフは旧約の定めに従って、つまり律法に従って割礼、初子奉獻をおこないました。一家の目的地のエルサレム神殿には一見すると古臭い人にみえるシメオンとアンナがいました。しかし彼らは聖霊に従って神殿にいました。

旧約 = 律法、新約 = 聖霊と図式にすると、旧約の定めどおりに神殿に向かったイエスの両親は旧約に属するタイプ。聖霊がとどまる人、シメオンとアンナは新約に属するタイプとなります。若夫婦が新しいのではなく旧約、年老いた男シメオンと 84 歳の女アンナが新約という対比です。

エルサレム神殿はその舞台を提供していて、エピソードのほんとうのところは聖家族と呼ばれている若いヨセフ一家が聖霊と共にいた年老いた男女シメオン、アンナによって、新約の恵みを見出す、生後 40 日の幼子イエスが指し示す救いを受けることをいっているのではと思いました。

ただ、シメオンが賛歌の後にいうマリアへの悲劇の予告「あなた自身も剣で心を刺し貫かれます」とあるようにその救いは簡単ではありません。また、わが子の中に救いを見る「子はかすがい」という意味合いならばわたしたちの間にもわかり易い意味なのですが、ことイエスの場合の「救い」は両親の間だけにとどまるものではありません。その深い意味合いをヨセフ一家がほんとうの意味で知るのはまだ後のことになるかもしれません。しかし、奉獻の出来事としてこのエピソードが伝えられていること、またその意味を味わえることはわたしたちによつての大きな喜びです。
